

物理気候学講座と木田秀次教授

廣田 勇

京都大学理学部の地球物理学教室は時代の流れとともに大きく変貌しつつあります。今の若い世代、特に大学院生やポスドクの方々にとって 20 年 30 年前の頃のことは歴史上の遠い昔のことと思われるかも知れません。しかし如何なる分野においても学問は伝統の継承が大切です。その意味でこの小文では教室の気象学・気候学の歴史のひとつまを記しておくことにします。

今から 30 年ほど前の 1970 年代末には、我が国の地球物理学分野で新たな動きがありました。それ以前の、いわゆる旧帝大関係の限られた講座で行なわれていた研究教育が全国規模で新しいテーマに即した組織作りとともに発展を始めました。京大では、教室の気象学講座を担当されていた山元龍三郎教授が、旧来の地理学分野で扱われていた気候学を現代的問題意識のもとで大気大循環論と結びつける方向を打ち出され、気候変動の研究のために理学部附属気候変動実験施設を設立されました。現在社会的な関心を集めている地球温暖化などという言葉がまだ殆ど知られていなかった昭和 56 年（1981 年）のことです。

気候変動実験施設は当時の文部省の方針で 10 年の時限付でしたが、施設長になられた山元教授は、地球全域の気象記録を集めて解析を行ない、長期間に亘る地上気温の時間変化のなかにトレンドとは違う特殊な気候遷移過程を発見してこれを「気候ジャンプ」と名付けるなど、優れた研究成果を生み出しました。

施設が時限を迎えた平成 3 年（1991 年）、教室では気候学の研究をどう継続発展させるべきかの議論を行ない、当時の教室主任であった中川一郎教授（測地学）のご尽力で施設の定員を振替えた講座を教室に新設することができました。

講座名は、既存の気象学講座とのバランスも考え、またやや古い語感の気候学を避け、地球物理学の一分野としてふさわしい物理気候学としました。

新しい講座を立ち上げるに当たっては、当然のことながら将来の研究教育の理念が必要です。教室内でほぼ一年を費やした議論の結果、当時、筑波の気象研究所物理気象研究部の室長をされていた木田秀次氏を教授にお迎えすることになりました。木田氏は、東大地球物理学教室で成層圏オゾン変動をはじめとする地球規模子午面循環・物質輸送などの研究で学位を取られた後、気象庁で数値予報モデルの開発や気象研究所で局地気候モデルなどの研究を続けておられ、新しい物理気候学講座担当にふさわしい方として京都にお招きしたわけです。教授着任は平成 5 年（1993 年）の 5 月でした。

それから御定年で退官される平成 18 年（2006 年）3 月までの 13 年間、木田

教授は主として気象研究所時代以来の局地気候の研究を手がけられました。またその間、学術会議の気象学研究連絡会や気象学会理事など、学外の関連したお仕事にも熱心に活動されました。しかし、生来頑健とは言えなかったこともあり、責任感からお仕事を数多くお引き受けになったことがご健康に障ったのでしょうか、ご退官後わずか半年の平成 18 年秋に 63 歳の若さでご逝去になったのは残念の極みでした。

これからの物理気候学は、新講座設立当時の初心に帰って、より一層の発展を目指すことを念願してやみません。

(ひろたいさむ。気象学。平成 13 年 3 月定年退官。現在京都大学名誉教授)